

熟女の素顔は、出張の夜だけの もの

年下ヒロイン（成人）の熟女が、春の出張で距離を縮める
——触れそうで触れない時間を重ねた末の解放

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

熟した蜜柑のような香りを纏った女性が、静まり返った部屋に足音を消して忍び込んでいた。それはまるで、長い冬眠を終え、春の訪れを告げるように現れた生命体のようで、和真の視界をすぐに埋め尽くすほど存在感が強かった。彼女はかつて住人としてこの家を支えた大家でありながら、今は和真という若い店子の隣人のような存在へと姿を変え、彼との距離感を微妙に変化させていた。雨音が窓ガラスを叩くリズムに合わせて、彼女の呼吸も同調し始めていたのは不思議ではなかったが、なぜか空気が重苦しく、かつ甘酸っぱい緊張感に満ちていたのも事実だ。

和真は机の上に積まれた書類を片手に立ち上がり、鏡像のように映る二人の姿を見つめた。彼女は普段ならどこか堅苦しい格好だが、今夜は薄手のシルクシャツにタイトなスカートだけという、生活感から剥ぎ落とされたような姿だった。髪は肩にかかる長さに整えられ、額には濡れたような汗ではなく、体温上昇によるうっすらとした光沢があった。和真はその女性へ近づき、指先で彼女の首筋にある小さなほてりを確かめる。そこはいつもより激しく脈打っており、僅かな接触にも反応して微かに震える肌触りを感じ

じた瞬間、和真の背筋に走る電流のようなものが走った。これは単なる再会ではない。長い別れを経て、再び同じ空間に収められた二つの体温がぶつかる時特有の、言葉では言い表せない焦燥感が支配的だったのだ。

「また、帰ってきたのか」

その声は低く、喉元で滾ってこぼれるような響きを持っていた。女性は振り返らず、和真の手が自分の腰に触れていることに気付きもせず、ゆっくりと息を吐いた。その吐息が頬を撫でながら消えていく様子は、彼女自身がか細い風のように溶け込もうとしているかのようにもあった。「いつものように、また遅刻だ」と苦笑いしながらも、彼女からは決して疲れ切った様子がない。むしろ、和真の存在だけを求めているかのような、貪欲な視線で周囲を掃討していく。雨音が徐々に遠ざかり、室内だけが二人の呼吸音という狭い世界へと収縮していくのを、彼女は静かに体感していたようだ。

和真は彼女の肩越しにある窓の外へ目をやった。春の訪れを告げる濡れた空気の中で、彼女という存在がどれほど鮮やかに浮かび上がっているかを観察した。彼女はまるで和真が生きてるだけで、この部屋自体が温まり始めるような魔法のような持ち主であった。普段なら事務的な対応や、大家としての威厳で彼を押さえ込むが、今夜はこの関係

性をあえて曖昧にしたまま、距離感をゼロにしてしまおうとするのが彼女の策略だったのか、それともただの本能なのか。和真にはまだわからない。彼女が和真に求めたのは、単なる触れ合わせではなく、互いの境界線が曖昧になるまでの、ゆっくりと焦らすような時間そのものだったのである。

「今日は……ちょっと特別ね」

女性はようやく口を開き、声に込めた潤いを和真の耳元まで運んできた。それは言葉よりも先に、唇から溢れる蜜のようなもので、和真の意識をすっと引きずり込んでいった。彼女は和真の手を捉え、自分の胸元の柔らかさを示唆するようにそっと押し付けた。そこからは絹布特有の冷たさと、体温で溶かされていく熱さが同時に感じられた奇妙な手触りだ。指先の感覚が麻痺するほどに、彼女の存在は和真の世界観を変容させていた。これまでの日常という名の平穏が、この再会によっていかに薄々壊れ始めているかを、和真はその女性的な優しさに気づかないうちに察知していた。

「春だな」

女性は窓際へ歩き出し、袖を通した手を振った。その仕草には自然体でありながら、どこか演劇的なロマンがあった。雨音が部屋の中にも浸入してくるかのように、湿気を

含んだ空気の中で二人は浮かぶ舟のようだった。彼女は和真に向き直り、今度は彼の視線が自分自身を捉えたことに喜んでいるかのようだ。「また、こんな風に惹き合うなんて」と呟く声は、まるで自問自答でもあった。しかし、それだけではありませんでした。彼女は和真の中に潜む、彼女に対して抱くばかりの渴望を鏡のように映し出し、それを肯定するかのような笑みを浮かべたのだ。

和真は再び彼女へと歩み寄り、彼女の首筋で汗ばんだ肌を撫で回した。そこからは、長い出張生活から戻ってきた疲労とは裏腹に、蓄積されたエネルギーが炸裂しようとしていた。彼女は決して静かな存在ではなく、内側から湧き上がる情熱と、外見から滲み出る艶やかさを持つ矛盾した存在だった。その両面性が交錯する時、空間自体が歪みかけるような圧迫感を感じさせるのが、彼女というヒロインの魅力ではなかったのか。和真はその感覚を楽しみつつも、いかにしてこの女を翻弄すればいいかわからないほど、彼女の影響下に置かれていた。

「もっと……近くて」

女性は低く囁き、自分の唇を動かし始める。それは何かを伝えるためでありながら、同時に何かが消え去ろうとしている予感がしていた。手触りの滑らかさと、温もりが伝わってくる感覚だけが、二人の距離感を測る唯一の基準に

なっていたようだ。雨音のリズムに合わせて、彼女の睫毛が震えるたびに、新しい刺激が和真の皮膚に触れようとしていた。これは単なる夜の只中への序章ではなく、二人の関係性が根本から書き換えられつつある瞬間だった。これまでの常識や、大家と店子としての役割分担など、一切のしがらみを捨てたまま、ただ肉体と心の隙間を埋め尽くそうとする衝動に、和真は飲み込まれていくのみだ。

彼女はゆっくりと和真の胸元に顔を寄せ、吸い付くようにして彼の体温を貪ったかのように振る舞う。その仕草には、まるで初めて会った恋人のような純粹さと、長年見知ってきた親密さの両方が混ざり合っていた。会話も交わされたが、言葉は足し算ではなく引き算のように作用し、残るのは僅かな静寂と、そこに残された熱の痕跡だけとなった。この空間は彼女によって彩られ、和真という主人公さえもが、彼女という存在に支配されているかのようになった。雨上がりの夜空の下、あるいは室内という限られた舞台上で繰り広げられる、二人だけの小さな世界観が完成寸前だった。

「さて」

女性は立ち直り、その視線が一瞬たりとも和真から逸れることなく、彼自身の内側へと向けていた。それは、これから始まる行為の予感よりも先駆ける、もっと根源的な欲

望の兆候だった。和真はその女に見透かされようとしていることに苦笑しつつも、なぜか彼女の掌の温もりだけを追い求めた。物語はここで一旦留まり、次の瞬間へ羽ばたこうとしていた。すべては春の訪れから始まり、雨の音に紛れて二人の境界線が溶け合うまでの、短いけれど濃厚な時間の片隅から切り取られたプロローグだった。



——ここから先は製品版でお楽しみください——